

松屋叢話

二編

松屋叢話

15

1402

2止



松屋叢話卷第二

目録

石敢當の考

三嶋自寛が歌

平澤元愷が文章よもぐもたり話

太田元貞經學よもぐもたり話並詩

太田敦が詩

太田氏の女晉が詩

太田氏の兒玄齡と如晦が詩

筑紫の僧が海賊と遇て歌よめたり話

甲斐國の百姓が名歌よめける話

栗田口邊よめりる食が歌

三田幸二
高田早苗

道三法印紹巴法橋贈荅歌の詠

大窪行が詩聖堂建一詠

大窪行明人婁堅が真帖を賒得る詠

糸井翼が詩

正木十幹が墨田川あてのあり歌

正木十幹が夢よ歌をける詠

栢木祖が詩

卷大任が詩

おほいこの人は序跋などをもどき詠

茶其馨が書法世よどき詠

上野國桐生人佐羽芳が詩並その里に近き

そりなる大巖中へく聯句の詩はくき詠

清水濱臣が歌よめづる詞よめ詠

清水濱臣が師の歌を改人と企一詠

墨田川よめりける花は薩の詠

太田元貞深川木場あき詩はあり詠

ある人清水濱臣が歌の解をける詠

菊池桐孫が詩並五山堂と号せ詠

中村佛庵がそり天竺佛像の詠

菊花のそり事

八幡宮の御名の考

松井玄輔が詩

山本謹が詩

細桃女史と翠雲女が画よめり詠

美濃國大垣人江馬蘭齋の女の詩

清水濱臣の歌

梁卯の詩

御國の稱は皇國と書をうるべし。いづるもどかたし。や
古書よりいづく雅字を撰べき事

松屋叢言卷第二

江戸

源與清文儒著

美濃

梁卯伯兔校

石敢當といふものは。今もなほ所々に残りてあり

り。集古十種碑銘部六の卷。肥後國石敢當。

高サ三尺八寸四分。幅一尺三寸一分云云。橘南谿が

西遊記一の卷。薩州鹿古嶋城下町々に行當と。

或は辻街などあり。必高サ三四尺計なる石碑

あり。石敢當といふ文字を彫付たり。いづれ

ゆゑぞと所の人と問に。昔より致し来りたるなり

あり。いづれなるやと問に。いづれと云ふ。後ハ畷耕

録と云ふ。此より出たり。其文曰。今人家正門適

當巷陌橋道之衝則立一小石將軍或植一小
碑鐫其上曰石敢當云云薩州は日本に極西南
に在て唐土に近くむろろの往來も自由な
るゝも彼地もろろ見及び來るも
此地は作を置ゝ又田畠に石を衣
冠の像を彫て居る。田夫とては田の神を
いふ。も彼畷耕録に石將軍の類は
日本に衣冠の像はなからるもの
皆他國よりはるもの。伊勢などハ石を
將棊の駒に形を作る。山神と彫付て村里に
出口を必ある。是も他國よりある。ほく
えるもの。石敢當を京高辻天満宮に社前

は昔はありといひ人あり。今を云。百井
塘雨が爰埃隨筆五の卷に薩州鹿兒島に町々
行當も街のどなる所ある。必三四尺なり
なる一石碑を立石敢當に三字を鐫る。い
ある問も人あり。後畷耕録に
十七の卷に曰。今人家正門適當巷陌橋道之衝則
立一小石將軍或植一小石碑鐫其上曰石敢當
以厭禳之。按西漢史游急就章云石敢當顏師古
注曰衛有石碯石買石惡鄭有石制皆為石氏周
有石速齊有石之紛如其後以命族敢當所向無
敵也。據所說則世之用此亦欲以為保障之意
云云。薩州の外他邦に見るもの。徐氏筆精に

いふ所もあまにせむ。或曰。京高辻天満宮社前
先年ありといふ。今いふ云云。自注あり。此社は
二條より北へ町を行當りて。此石が有地也云云。
伊藤長胤が盡簪録四の巻。雜載篇。史游急就
篇。列諸物名稱。以課程學童。其中設入姓名。有
石敢當。師古注曰。敢當言所當無敵也。王應麟
補注曰。孟子曰。彼惡能敢當我哉。胤按。後世名
當門神。曰石敢當。其名取于此云云。藤原貞幹が
好古日録一の卷。肥後國ニ立ル所ノ石敢當。
其字大サ尺餘。其書奇古。打本希ニアリ。何ノ人
何レノ年ニ立シニヤ云云。自注。郡及邑ノ名ヲ忘ル
云云。なごええもく。五代史十の卷。漢本紀あり。

高祖睿文聖武昭肅孝皇帝。姓劉氏。初名知遠。
其先沙陀部人也云云。與晉高祖俱事明宗。爲
偏將。明宗及梁人戰。德勝。晉高祖馬甲斷。梁兵
幾及。知遠以所乘之馬授之。復取高祖馬。殿而
還。高祖德之。高祖留守北京。以知遠爲押衙。潞
王從珂反。愍帝出奔。高祖自鎮州朝京師。遇愍
帝于衛州。止傳舍。知遠遣勇士石敢袖鐵槌侍
高祖。以虞變。高祖與愍帝議事未決。左右欲兵
之。知遠擁高祖入室。敢與左右格鬪而死。知遠
即率兵盡殺愍帝左右。留帝傳舍而去。とあると。
事文類聚後集十八の卷。勇敢の部。石敢當と
標出。明人徐勣が徐氏筆精六の卷。事解孔

耶中御幸日。七十二騎是先驅。他家孫子今猶古。吾獨寒酸。一腐儒。この監物を茶藝。やど
 ちも名を得て。世は宗易門七哲とよむれ
 人。子孫ゆゑありて氏を大田とわく。あ。加賀
 國。あうし。あうす。う。元貞。う。孔道乃
 學。た。う。九經の旨を推明。ら。え。う。う。
 う。い。う。博士。う。う。う。文。う。う。う。
 う。う。う。硯。う。う。う。紙。う。打。う。う。う。
 う。う。う。文字。う。う。文字。う。文章。う。う。う。
 ぬ。見る。人。あ。う。う。う。う。う。う。う。う。
 心。う。う。う。う。う。時。う。う。う。う。う。う。う。
 出る。う。う。古。う。う。打誦。う。う。う。う。う。う。う。

春日病中といふ題。芭鞋何日訪山家。抱病連旬負物華。想像林園芳世界。春風今到幾番花。野水一叢垂桺野村春。春水縱橫不辨津。昨夜雨過深數尺。揭衣難渡訪花人。暮春散步江邊。風日晴和春吏闌。詩翁行樂傍江干。神祠佛院又何擇。凡有花家必入看。花後又過野村。春深何處不消魂。流水小橋前度村。一路風光花已盡。綠陰滿目易黃昏。今春の詩を余が耳につる中に。

大田魯三郎敦。字は叔復。號を晴軒といく。弱冠。
元貞。父次の子。もろやくより。經學よ心をもちて。

論語孟子周易此論議書。隨筆。二卷。ひはせり。初夏偶成の詩。緑葉陰陰清晝長。薔薇花發有幽香。茅堂坐睡閑無事。斯裏樂如南面王。書懷。窮巷書生難得君。雄飛何日冲青雲。晚汀水落釣磯出。早買漁蓑入鷺群。

大田氏晋は元貞が第四女なり。字ハ景昭。號と蘭香とをいける。と。なり。詩。行書。妙。梅邊歩月。とい題。偶訪幽香野渡東。閑吟停杖立春風。水流清淺黃昏月。身在橫斜疎影中。と。菊池桐孫が讚。大窪行。野梅の詩。

竹柵茅簷野渡頭。幽姿一樹映寒流。春風桃李滿城錦。梅與春風風馬牛。

大田元貞が五男と。遮那四郎と。名を玄齡。字は季喬。年十四。詩。妓家花の詩。千樹嬌櫻披絳霞。春風馥郁入娼家。美人相對倚樓處。醉眼難分誰是花。題画。蘆洲雨霽水流肥。一抹淡烟偷翠微。孤鴈數聲秋色靜。漁舟空載月光歸。弟と金剛五郎。名は如晦。字を李明と。年十三。詩稿已堆。田家春雨と。細雨茫茫柳色新。輕風吹處水為鱗。紅綻村村春富貴。短蓑多是訪花人。暮春と。澹雲不散雨霏霏。數樹垂

楊吐^ニ嫩金^ヲ訪^フ花^ハ心^ハ被^レ讀書^ニ惱^マ九十春光已^ニ緑陰^ニ
なごほくもさしあく此ほくくはさえやいさ
べーゆくもさしあくさくさくさく
筑紫の僧^{ハクシ}が都^ミのぼりくもた。海賊^{シラナミ}はあひくかきり
し物のさくさくさくさくさく。世人さくさく
さくさくさくさく
くさくさくさくさく墨深の神さくさく
沖^ミのさくさくさくさくさくさくさく
あさきさくさくさくさくさくさくさく
やとく和尚位の宣さくさくさくさく
享保の頃^{コト}甲斐國の民^{タミ}がさくさくさく
あひくさくさくさくさくさくさくさく

みくさくさくさくさくさくさくさく
せよさくさくさくさく
栗田^{アサダ}口^{クチ}さくさくさくさくさくさく
ぬさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
ゆくさくさくさく
道三法印^{ミチサウホウイン}八十八さくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
あさくさくさくさくさくさくさく

へさずなりぬ。千幹あなをくぐりこれをも
 抱いてあるく。よ。ある夜の夢よ
 びくもこれ小簾ももをいあつたもど人乃を
 あつてもさうけつ。とみけつとんくをわにり
 りあへりける夢のたり。あつるもの。
 かなはあやしもうよみんあひ。

江戸人栢木祖字永日は、號を如亭といひくると
うゝうゝいよと名高くもてえり。うゝく書画
あも妙なりき家とぞそゞみづゝ髪除ぬる時の
詩は頭髪除来恰歲除明朝且喜不須梳腰間
欠久新磨劍麓底焚空舊妓書守歲燈寒游子
様迎春薰冷野僧如胸前俠氣都銷盡儘客罵

来呼^テ禿^ニ驢^馬_一、いけり、都^{ミヤコ}のほりなる時のか
う、一路関間始^テ解^ク鞍^ヲ帝城高^{タカ}在五雲端袖中^ニ
行卷無^ニ佳^シ合^ニ不^レ説^フ胡琴我善^シ彈^ハい、あち行^キ方^ヘさ
わ、いづきの國ありさ、いん。

越後國新泻人卷大任字致遠は號と弘齋とを
いひゆる。あつとくは巧くあり。そしとが栢木昶と寄
る詩。山人吟嘯今何處。故里頻年雁影疎。吉
備精廬見人説也。留一鶴守琴書。
學者の大業は著述と志とをなり。旁註。標註。増

註。刪補校訂。も。い。も。い。も。い。な。る。よ。い。も。ん。や。
み。の。力。を。い。く。く。書。あ。い。く。せ。る。籍。を。や。
と。も。と。ん。論。衡。や。も。世。儒。より。文。儒。が。立。ち。あ。り。ぬ。る。

うゝもや。已は今此清人の真帖よりてたゞは
あゝとまなぶ。その筆者のあゝ人よあゝはとて
いふ。其のいふのあゝの遺風を存しうゝるに
搨本よあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝ清人の書法を
得る後晋唐よとてのあゝ人も又うゝるゝあゝはるゝ
古搨本よとてあゝはるゝ筆をうゝるゝあゝはるゝ其馨
長崎より純羊毫を得るゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ
江戸此書家よ示せよ。一のあゝはるゝあゝはるゝあゝ
あゝのあゝ。其馨るゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ今
清人あゝはるゝ此筆をうゝるゝあゝはるゝあゝはるゝ
の書家小文筆あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ
彼域の風よとてあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ
證あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ
實あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ

書あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝ
製あゝはるゝ琉球人の用筆にうゝあゝはるゝ清國
せとて筆あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝ
あゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝ
毫毫若馳笑世亡羊硯田上。本斯小道不多岐
上野國桐生人佐羽芳字蘭卿。號と淡齋ととてあゝ
かゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝあゝはるゝ
寮あゝはるゝ詩よ松影暗窓櫳。濤聲在半空。簷低常
礙月。簾薄不遮風。遣興詩多味。驅眠茶有功。主
人何所慕。自比竟陵翁。あゝはるゝ閑居よ。世事紛紛
擾似雲。此生堪懶不堪勤。田園已熟桑麻計。丘
壑將追麋鹿群。一枕夢後閑處結。四檐雨向靜

頭圓圓。陸奥之人鞠估客。稱隱忽逃。編戶籍。兀然驢首新衲衣。名冒菩薩在火宅。四民有業汝無營。東走西奔任自適。朝陪豪家金玉饌。暮宿倡門桃李陌。何羨遺世其情閑。却笑遁跡彼境僻。隱乎隱乎得其所。嗚呼莫浴昇平無涯津。とくも今もは薩づづのゆりあをむめとくる。此ほさの門。吉原丸海花屋の花嬢會見とけいさるづづと寄進とあり。なての僧寺ありせむ。禁酒の碑あり。つぼきとささる。は薩もささる。花とさふさふの歌とせんありたり。ほさ著述の神通かろく。春の七草。秋の七草。都島の三考とあり。はせり。今志づ

あゝと又二考とさる。ほとんで五考とも著出せへん。あなただものほ薩もな。ある時梅やとといふ五とを句の上におきて。うづみをもめとやおれと。うづみとさる。な

弥生のほとづり。太田元貞オホタノモトサダウヅマノマサカ其馨梁卯ヤナノミヅルなと。かゝりて深川とあり。せうえうとあり。おのめとさる。時元貞がほとづり。詩。草軟野塘ヤサカシ宜意行。小橋幾處。水縱橫。花時不識リキ此奇絶。每過緑陰多。是櫻梁卯オチがくも。韻と次と。詩もあり。とさる。砂村とあり。はせり。余があり

篋中留集五部。一、白香山。一、李義山。一、王半山。
一、曾茶山。一、元遺山。外此無有。因以五山名堂。
有句云。家徒四壁立。書僅五山存。と書くる心
く。又の號を小釣雪ともいふ。楊誠齋が室を
釣雪舟といひとある。ある時蟲
轂の詩を流し出さる。寫得清商曲自成。韓
家那說不平鳴。笙歌沸處爭容汝。杖屨踈邊只
任卿。莎徑蓼汀秋十里。殘燈破壁月三更。口頭
織絡文章是滿地。擲來金石轂。告天子と
いふ。絶句三詩あり。野烟初暖散朝陰。茶
褐衣輕春已深。決起終揚三四尺。帶轂稍上幾
千尋。看看仰面眼將穿。午日薰人笠影圓。飛最

高時乍相失。轂微杏在彩雲邊。一身容易下雲
梯。叫罷天闔日未低。斜落籬間無覓處。偶然認
得菜花西。告天子。歌あり。あまのこゝろ
このころ。かゝるいふあり。このころ
さういふ。元人の古詩一首のころ。え
ある。今かくあるあり。と詠とく。せし
り。五山堂詩話十六卷と著
て。陸續刊行せる。隋園詩話の卷に
あり。さういふ。

中村彌大夫言蓮入道。号を佛菴とす。ひく。
世より。佛学者あり。真言密教のひね
とさる。ひく。悉曇の義理よく。先

見未發の論を著して。著稿已に堆タマシカ。天竺佛をえりて。靈場といひて。求モト。西域の銅質カナアチは。六年へ。僅ハナ。泥像。一軀ヒトミナラ。佛菴ブツ。趣の古色の。わ。僧ソウ。貧道ヒンダウ示シ。せん

め。佛菴。國クニ。高麗摹造の佛。隋の戴顓ダイシュンより。正像を改。如意圓滿の。高麗の。天竺佛といひ。高麗佛といひ。の僧ソウ。

あちこちの機巧く。佛舍利を納奉る。茶
毗の灰をこころおきこころ。そのあやしくも一
なるる。いふはあやしい。いふはこころ。此の意は
しる入道がこころ。余別は天竺佛像記を
書ておろし。いふはあやしい。いふはこころ。

古今集。秋下。在原業平。朝臣のこころ。

うきうきは秋なると。あやしくも。人花をいふ
旅さ。いふはあやしい。いふはこころ。八雲御抄を
いふはあやしい。いふはこころ。打聞の標註。いふは
か。この花はあやしくも。いふはこころ。散る。いふは
いふはあやしい。いふはこころ。楚辭。離騷。朝飲。木蘭
之墜露。夕食。秋菊。之落英。事文類聚。後集。廿

九の巻。應邵が風俗通と引く。南陽郡鄴縣
有甘谷。水甘美。云其山上有大菊。落水。從山下
流。得其滋液。谷中有三千餘家。不復穿井。仰飲
此水。上壽百二三十。中年亦七八十。小説粹言
第一回。王安石が西風昨夜過園林。吹落黃
花滿地金。といふ。いふはこころ。詩。蘇子瞻といふ
いふはこころ。爲何説。這兩句詩。是亂道。一年四季各
有名。春天爲和風。夏天爲薰風。秋天爲金風。冬
天爲朔風。和薰金朔。四樣風。配著四時。這詩首
句説。西風。西方屬金。金風。乃秋令也。那金風一
起。梧葉飄黃。羣芳零落。第二句説。吹落黃花滿
地。金黃。花即菊花。此花開於深秋。其性屬火。敢

與秋霜鏖戰最能耐久。隨你老來焦乾枯爛。並不落瓣。說个吹落黃花滿地金。豈不是錯誤了。興之所發。不能自己。舉筆舐墨。依韻續詩二句。秋花不比春花落。說與詩人仔細吟。さて蘇子瞻黃州より流るる。その國よりわかれ。時當重九之後。連日天大風。一日風息。東坡兀坐書齋。忽想定惠院長老曾送我黃菊數種。栽於後園。今日何不去賞玩一番。足猶未動。恰好陳李常相訪。東坡大喜。便拉陳慥同往後園看菊。到得菊花棚下。只見滿地鋪金。枝上全無一朵。諷得東坡目瞪口呆。半晌無語。陳慥問道。子瞻見菊花落瓣。緣何如此。驚詫東坡道。李常有所不

知。平常見此花。只是焦乾枯爛。並不落瓣。去歲在王荊公府中。見他咏菊詩二句。道。西風昨夜過園林。吹落黃花滿地金。小弟只道此老錯誤了。續詩二句。道。秋花不比春花落。說與詩人仔細吟。卻不知黃州菊花果然落瓣。此老左遷小弟到黃州。原來使我看菊花也。たゞかゝるは書あつても。これもある例ええ。こと。榮雅抄にも。餘材抄にも。散りては釋して。こと。なり。類聚國史七十五の卷。曲宴部。延曆帝の御歌に。已乃已呂乃。志具禮乃。阿米爾。菊乃波奈。知利曾之奴。倍岐阿多良。蘇乃香乎。と。ものせ

八幡宮はもと豊前國宇佐郡は八幡といふ里あり
 といふ。そこはつづまりありて。やぐり社の御名を
 たりて。神名帳は。豊前國宇佐郡八幡大菩薩
 宇佐宮。もと石清水八幡宮護國寺略記は。筑紫
 豊前國宇佐宮なり。あまた。むかし。後の表ざま
 めく。あまた。宇佐郡坐八幡宮とてありて
 けり。そは續日本紀十七の卷。天平宝字元年十二
 月の條は。戊寅遣五位十人散位二十人。六衛
 府舍人各二十人。迎八幡神於平群郡。もと丁亥の
 詔は。豊前國宇佐郡爾坐。廣幡乃八幡大神と
 いふ。此外も。さる書例ありて。さして八幡ハ
 地名なるべきあり。諸國は幡多。蟹幡。八幡など

一の所ありき。ありて。きは彌重島。まゝハ火田。孔
 略語あり。和名抄。野老傳云。横截山作島。謂之
 截幡。其田先焼後耕。謂之焼幡。と見えたるをも
 ぞいあせせくあるべし。此ハ幡の神をいふ。いま
 しのりしより。山城なるも。筑前。對馬。その外の国、
 なるも。これハ幡宮とわづらひし。ハせしめて。神功
 皇后緣起。赤白の旗ハ流降し。は起る。うゝとす。
 たる。わ。も。い。の。り。く。傳會せしむ。る。うゝとす。
 松井元輔。字ハ長民。号と梅屋といふ。陸奥國仙
 臺人。あ。く。か。う。う。い。は。る。も。と。た。く。み。え。の。も。
 送松浦乃候歸故郷詩。遂初賦就拂衣去。妻
 抱兩兒。僮負書。為喜先生見機早。絶勝通老老。

移居

山本謹字公行。世稱と亮助といふ。山本信有が
子あり。儒学は名あり。兼く茶藝と
嗜て。風流は心をよせり。その居は緑陰茶寮
とせり。ある時。清閑聴雨
坐。藜床。爐烟消盡。重添香。比昨窓頭昏較早。讀
残周易兩三行。

緗桃女史は山本謹の母あり。画くは名
あり。花鳥は。翠雲と。画と谷文晁は。年より
十二あり。墨梅は。妙なり。書は。琴は。茶藝は。
挿花は。香は。これなり。

わいを得たり。山本謹の娘は。美濃國大垣人。江馬蘭齋の女をたは子といふ。
書。画。琴。茶藝。香道。何れ道なり。画竹は。妙なり。曉起の詩は。長庚如李一星明。獨先啼。
鴉繞砌。行知道。前宵微雨。過芭蕉。殘滴。兩三聲。
おと名を。清玉。字を。細香。といふ。
清水濱臣の。これなり。

卯なり。名所早春。
いさ。寄硯懷舊。

るよとてとて——おやのふれとてなでて祝の
うみとてとて。述懐よ。
後の世は誰とん名をかくしめかくてハ
教はるすとも。こもこも中村仏菴が得意の歌
とてとてこひよ書てあつた。近頃本間游清が
家の歌會の日。藤原彦磨が短冊出——歌
ふい——とてとて書つとも。此述懐の歌なり。
梁卯字伯免ハ美濃國人なり。詩はるる——
こよわうとてとて。日本橋檜物町は家おいて
讀騷齋といふ。まこみづ——とて詩禪道人
とも。懶和尚もいひ——とて中秋對月有
感といふ詩よ。人間譙席自絃歌。銀燭光中萬

綺羅却是天邊風露冷。嬌娥脈脈奈渠何。こ
小遊仙詞十首の中。帝就仙班命法曲。一時
應詔董雙成。水晶宮裏月明好。十二參差作鳳
鳴。題吳主善画山居幽趣圖。は世上喧嘩不到
耳。溪雲野鶴伴琴書。人生若得閒如此。老死山
中儘有餘。なごこ也。は白樂天が與元
九書と讀て豁然とて詩趣とてとて。遂は文集の
秦中吟琵琶行以上と採て。古詩の則とす。近
躰ハ温庭筠李商隱より。元人元好問。
明人高季迪が體とてとて。は——とてとて
らり出る。
本居宣長が御國の稱は皇國と書出——とて。今ハ

界ト云ドモ。神國タルニ依テ。書ク。神代紀上卷。
於是陰陽始通合爲夫婦。及至產時。先生淡路
洲。此淡路洲爲胞廼生大日本。豐秋津洲云云。
三善清行意見十二箇條。我朝家神明傳統。
天險開疆。土壤膏腴。人民庶富。故東平肅慎。北
降高麗。西虜新羅。南臣吳會。三韓入朝。百濟內
屬。大唐使驛於焉納賄。天竺沙門爲之歸化。其
所以爾者何也。國俗敦龐。民風忠厚。輕賦稅之
科。疎徵發之役。上垂仁而牧下。下盡誠以戴上。
一國之政。猶如一身之治。故范史謂之君子之
國。唐帝推其倭皇之尊。ものんえんことを。神孔
御國なるものゝあくる神國と書たり。ものん

るゝ。續日本紀十一の卷七丁。詔曰。朕君臨九
州。字養百姓。云云。本朝文粹二の卷。天慶三年正月
十一日。官符。抑。一天下。寧非王土。九州之内。誰非
公民。云云。本朝麗藻。高積善。詩序。九州之地。
云云。經國集十の卷。釋空海。詩。九州八島云云。本
朝文粹二の卷。贈。故。菅右大臣。太政大臣。詔。九州
云云。な。ひ。は。西土。め。く。九州。も。九原。も。い。ん。
その義。め。り。て。書。たる。こ。此等。孔。熟。字。は。諸。書。よ
こ。も。い。れ。ん。え。ん。こと。今。を。おも。ひ。よ。も。つ。る。の。こ。後
舉。め。り。か。く。い。り。一。は。雅。字。ご。も。例。お。ほ。く。ま。り。
大八洲。大倭。大日本。な。も。書。人。を。い。り。も。さ。る。な。り。よ。
新。は。皇。國。と。し。も。書。出。る。る。い。り。も。さ。る。る。な。り。

どや。さて右の熟字どもは中々も。中國といふもの
をわづらひて。あやうやうやう。神國といふ
はぐべし。九州九原なども。時宜いもの。は書も
こそせむ。實はあのもの。ぬ字なども。心もべし。
り。續日本紀九の卷四丁。是以聖王立制。亦發
實邊者。蓋以安中國也云云。延喜式一の卷。歷運
記。至庚申年。平定中國云云。雄略紀二十三年。記
方今區宇一家。烟火萬里。百姓乂安。四夷賓服。此
又天意欲寧區夏云云。顯宗紀二年。大泊瀨天皇。
正統萬機。臨照天下。華夷欣仰云云。欽明紀三十一
年。五月遣膳臣傾子於越饗高麗使。大使審知
膳臣。是皇華使云云。儀制令。天皇詔書所稱。

皇帝華夷所稱義解。華華夏也。夷夷狄也。言
王者詔誥於華夷。稱皇帝。即華夷之所稱。亦依
此云云。賦役令。凡邊遠國有夷人雜類之所
應輸調役者。隨事斟量。不如華夏義解。夷夷
狄也。雜類夷之種類也。華夏中國也云云。古事記
序。愷悌歸於華夏云云。新撰姓氏錄序。神
武臨夏東征之年云云。鷹受明命。光宅中
州云云。神武紀三丁。欲東踰膽駒山而入中州云云。
類聚三代格五の卷。元慶二年二月三日の官符。
伏尋物情陸奥出羽之在絶遠。尚限五年。因幡
出雲之居中國。何得六年云云。なごんえん。中
國區夏皇華華夏中州。いづれも畿内近き國々

とく。秋津洲の大號あり。此外大號は中土。寰中。寰宇。天下。海内。なども書たり。假字は八嶋國。葦原中國。豐葦原之水。德國。夜麻登。秋津嶋。師木嶋。なども書る例を宜長が國號考より。扶桑といふも。扶桑といふも。扶桑集。扶桑略記。など書名あり。用ゝるも。西土人。が東方を指て扶桑と書るより。いへせ。延喜式。東西文部。が咒文。東至扶桑。西至虞淵。南至炎光。北至弱水。千城百國。精治萬歲。とある。中國あり。か。こは。東方を扶桑といふ。と。近比え。日東。大東。東方。など書出るも。こは。日東。とて

異國の名は夷蠻戎狄と書むを論なり。古書の例より。清國を唐國。漢國。西土。西蕃。などと書べし。唐も。大唐とも書る例。史は。大唐とく。西土と書る。孝德紀。十七丁は西土之君とあり。其外は。西皇帝。西王。西蕃。とく。神功紀。七丁の高麗百濟の王。後。今以後。永稱西蕃。不絶朝貢。とあり。加羅。ハ。の國。名あり。三韓。は。總名あり。漢地の名あり。諸越の字あり。説。和訓。なる。漢地の總名あり。例は。准て。西蕃と書る。異國を指て常世國といふ。その

松屋叢話卷第二終

松屋高田先生著書

○俳諧歌論前編一二之卷

二冊

發句。連句。文章。詩。歌。その外諸藝。學問の道。といふる。和漢は通考して。正義と論さる。學者至要の書。之前編十卷の中。三の卷を分て上中下とせし。全十二本あり。後編十卷と共に廿二冊の中。一二の卷を文化九年梓行せり。一の卷は俳諧といふ字義の論よりして。俳諧連歌の始。といふ語釋。俳諧といふ語釈。長歌。短歌。片歌の。和漢諸異國の樂の由来。雅樂寮。大歌所。内教坊。踏歌。催馬樂。風俗。歌舞妓。芝居など。その外も終にその由来をある。されり。二の卷は發句といふ。季なり。れ句の。連歌式目の由来。連歌と俳諧。といふ。正風といふ。歌といふ。れ心得。す。詩歌の六義の論。といふ。記さる。

○同三之卷 上中下

三冊 今茲刻

連歌めづぬやうにふむといふるの論。俗語ぞくごのる。俳諧は古人の
といふるの論。俳諧は四鉢は必ずといふ論。また古いにしへの発句ども
のよろしきやうを挙て注釋せしむる。

○文章正則

○鹿嶋紀行

○國名考

○天竺佛像記

○衢杖占

○宇津々物語

○聲史傳

梓行須原屋茂兵衛

○金剛の書

江戸 英屋平吉

○古言類

柏屋忠七

書林

○同

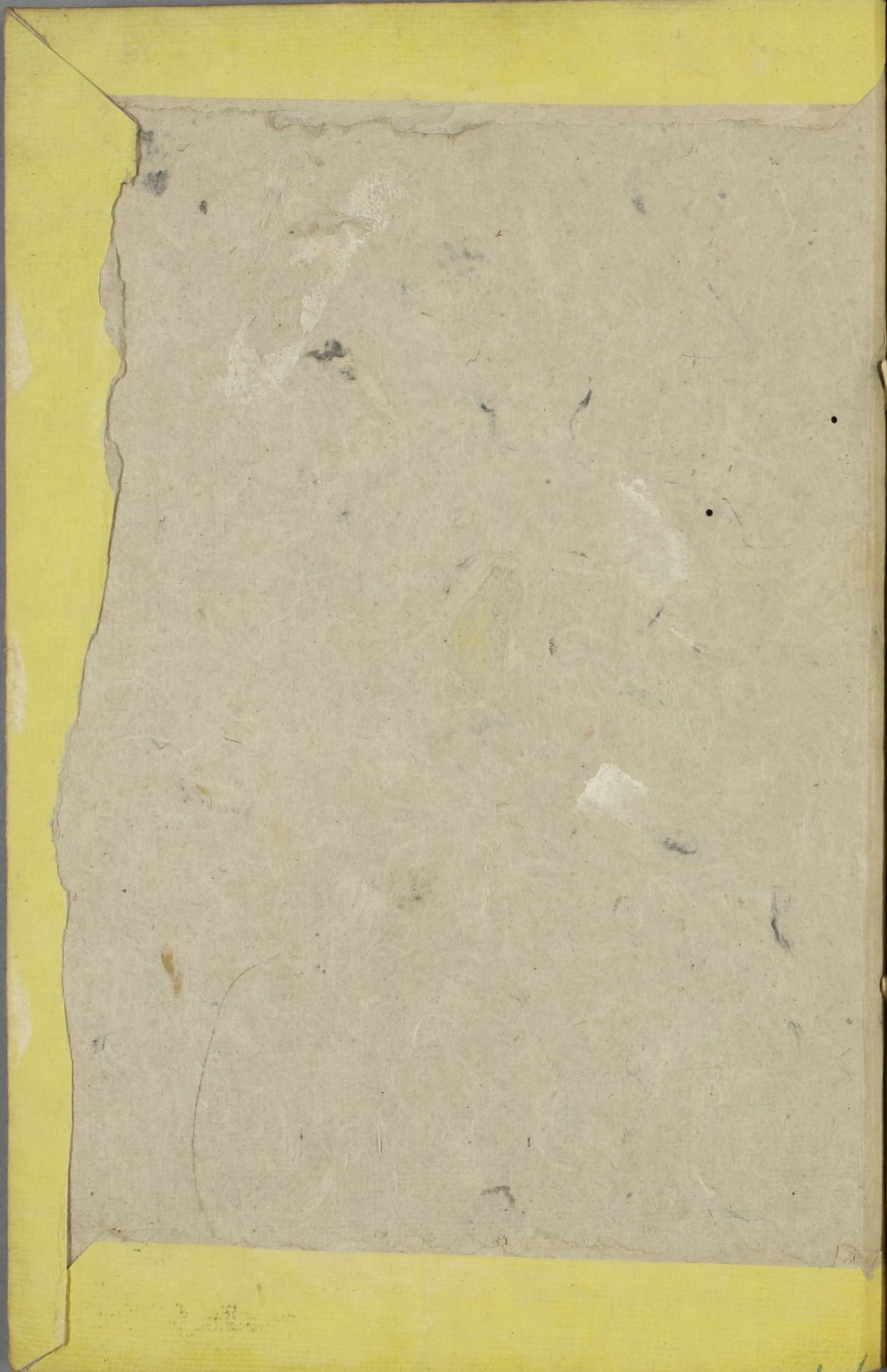
京 勝村治右衛門

○文章五限

大坂 大野木市兵衛

○文類

大坂 大野木市兵衛



大坂正則
國名考
傳教古
書林
○鹿嶋記行
○天竺佛像記
○津久野記
○江戶
英屋平吉
柏屋忠七
○大坂
大野木市兵衛
○勝村治右衛門



Handwritten signature or mark in black ink.

